


在外研究員研究報告書

2020年 11月 30日 受付

所 属	グローバル地域文化学部	氏 名	小川原 宏幸 	
職 名	准教授			
研究課題名	ヨーロッパにおける日欧関係史および東アジア植民地支配政策に関する研究			
研究期間	2019年 3月 31日 ~ 2020年 3月 28日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2019/3/31-2020/3/28	オランダ王国	ライデン大学	
研 究 費	306.6万円	研究成果の概要		別記 4,000字程度
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日
	演 題	講 演 学 会 名		講演年月日

研究成果報告書

小川原宏幸

今回私は、2018年度同志社大学在外研究制度を利用し、2019年3月31日から2020年3月28日までのおよそ1年間にわたり、東アジアの地域研究を盛んに行うとともに、ヨーロッパにおける植民地研究の一大拠点でもあるオランダ・ライデン大学において研究および研究交流を行う機会を得た。以下、申請した研究計画および研究成果について報告する。

私はこれまで日本の朝鮮植民地支配について、朝鮮半島をめぐる国際関係、日朝間関係、植民地権力と地域社会の関係という三つの次元において統一的に把握する研究をしてきた。一般に、近代帝国主義体制およびその下での植民地支配は、宗主国と植民地との二者関係だけでなく、世界体制として展開される。しかしそれをパワー・ゲームとしてのみ理解するのは不十分であり、植民地支配の本質をなす社会的排除や疎外といった構造的暴力は、植民地化に先行して存在する地域社会の差別体制を最大限利用することなしには成立しない。つまり植民地権力のあり方は地域社会の政治文化に規定されており、それとの協力・対抗関係から植民地化を位置づける必要がある。さもないと、植民地の構造的暴力は常に外部の帝国主義によってのみもたらされるものと把握されることになる。しかし、こうした観点は、脱植民地化を目指す際にむしろ障害となる。たとえば、独立を達成した諸国家・諸地域に、さらには植民地宗主国内に、依然として植民地主義的な構造的暴力が継続することを十分に説明できなくなるからである。

また私も含めてこれまで行われた日朝関係史の最大の弱点は、日本民衆の観点から日本の植民地支配の経験をきちんと検証できていないことである。かつてカール・シュミットは、第一次世界大戦において、ヨーロッパ諸国が国家理性を喪失していく要因の一つに植民地支配の経験をあげた。それは植民地支配の経験が宗主国自身をも変質させていくという指摘である。日本では、植民地責任を問う動きがようやく始まったばかりだが、植民地と宗主国との相互規定性を射程に入れなければ、やはり支配万能論に陥ってしまい、植民地および宗主国双方の民衆は客体化されてしまう。近年、日本の戦後経験が植民地忘却から始まったことが強調されているが、戦後日本の植民地忘却の動向は、上の相互規定性を射程に収めない態度と表裏一体である。植民地支配における暴力と戦争における暴力との連関性を、民衆史をも含んだ国際政治史的観点から再検証する必要がある。

以上のような観点から、今回の在外研究では、これまで行ってきた研究を実証的レベルで深めることよりも、ヨーロッパにおける植民地研究の動向を学ぶとともに、これまで行って

きた研究の理論的枠組みについて、オランダをはじめとするヨーロッパの研究者と研究交流を行うことによって再検証することを期した。私は今まで韓国をはじめ、東アジアの研究者とは数多く研究交流を進めてきた。しかし東アジアでの植民地研究は、植民地支配に対する客観的評価以上に、植民地支配を行ったことに対する道義的責任をめぐる議論が優先することが多い。特に、そこに賠償責任等を介在させることで、東アジアにおける植民地研究は常に政治的議論に回収される危険性をはらんでいる。もちろん、植民地支配責任をめぐる問題を深めるために、植民地研究の進展が望まれることは、一面では理解できる。しかし他方では、日本による朝鮮植民地支配を、世界的共時性や世界史的視座を射程に入れることなく、あくまで日韓・日朝問題においてのみ理解しようとする、日本という国家の特殊性にばかり目が向けられてしまう。植民地という構造的暴力が生成される場に目を向けず、それを例外的なものとして取り扱ってしまう限り、暴力の存在そのものに迫ることはできない。ヨーロッパにおいて蓄積された植民地研究を学ぶなかで、日本の植民地支配がもつヨーロッパ諸国の植民地支配との共時性や共通性、そして差異や特殊性はどこに求められるのかを検討する必要があるが、そのためにも、いったん当事者性を離れた観点から研究対象にアプローチすることも有効である。こうした作業を通じて、近代史研究の最重要テーマの一つである植民地主義を、暴力論的に読み解く方法を深めることが可能となるからであり、さらに地域研究における比較史的方法を大きく拡大させることにつながるものと考えている。

このような研究計画にもとづき、まずライデン大学に在外研究の受入れを打診した。近代日本の東南アジア支配政策史を専門とするライデン大学人文学部 (Faculty of Humanities) 准教授のイーサン・マーク (Ethan Mark) 氏に受入れ教員となっていただき、オランダでは、客員研究員として LIAS (Leiden Institute for Area Studies) という組織に所属した。オランダはかつて、現在のインドネシアを植民地にしており、ライデン大学でも東南アジア研究が盛んであるが、LIAS は、日本研究をはじめとする東アジア研究等も統合する形で発展的に成立したものである。先方に在外研究の受入れを依頼するにあたっては、ライデン大学の HP の記載情報にもとづき、まず SICS (Service Centre International Staff) にコンタクトを取り、その指示に従って受入れを希望する教員のメールアドレスに直接コンタクトをとった。先方の教員から受入れ許可が出たのち、SCIS の指示に従って必要書類をインターネット上でアップロードしていき、ビザをはじめとする入国手続きも事前に済ませることができた。さらに、滞在時の住宅斡旋をはじめ、住民登録申請やビザ取得、銀行口座開設の手続き、保険の加入に至るまで、親切にお手続きいただき、不案内なオランダでも比較

的スムーズに生活を立ち上げることができた。また、ライデン大学は、東京に事務所を構えており、今回の在外研究の受入れ先の選定には直接かかわったわけではないが、情報収集先として有用である。

オランダ滞在中は、所属先の LIAS の共同研究室や大学図書館を利用して研究を進めた。大学図書館では主に Asian Library を利用したが、ヨーロッパ随一のアジア研究センターだけあって、英語書籍はもちろん、日本語書籍、朝鮮語書籍等の蔵書が豊富であった。また、利用可能な電子ジャーナルやデータベースが充実していて地域研究をするには事欠かない研究環境が整っており、毎日のように研究室や図書館に通って資料調査や研究活動を行った。また、Asian Library には日本語に堪能な司書もおおり、折に触れてサポートを受けることができた。

大学のセンター長という多忙な役職に就いておられたこともあり、受入れ教員であったイーサン・マーク氏と頻繁に交流できたわけではないが、日本研究科、朝鮮研究科をはじめアジア研究に携わる教員スタッフを多数ご紹介いただいた。また LIAS からはシンポジウムをはじめとする大小の催し物に関する情報が提供され、折を見てそうした催し物に参加した。知人が日本から国際シンポジウム参加のためにライデン大学を訪問した折にも、そうしたシンポジウムに参加して研究交流を深めることができた。

先述したように、オランダはインドネシアをはじめとした植民地を複数保持した植民地国家であり、他の植民地宗主国の例に漏れず、博物館をはじめとした学術機関などに植民地支配に由来する文化財等が数多く収集されている。植民地主義と文化財や学知とのかかわりは、近年の植民地研究では注目されている研究領域であるが、アムステルダムの国立博物館をはじめ、ライデン市でも民族博物館や考古学博物館をはじめとする多くの博物館でそうした植民地主義の痕跡を色濃く認めることができた。オランダは、その脱植民地化の経緯から、少なくともインドネシアなどの東南アジア地域に対する植民地支配意識は比較的希薄であり、特に歴史学研究においては、植民地研究はあまり盛んではないという印象を受けたが、そうした植民地支配意識の希薄さが博物館の展示のあり方にも表れているように感じられた。

大学をはじめとする学術機関だけでなく、オランダで社会生活を送るなかで、植民地支配や脱植民地化について考えさせられるところが多かった。周知のとおり、オランダは現在、ヨーロッパの中でも比較的数量多くの移民を受け入れている国家であるが、そうした移民の誘因の大きな原因の一つとなっているのが植民地支配の歴史的経験である。オランダの場

合、かつて植民地であったインドネシアやスリナムからの移民はもちろん、20世紀後半の産業化過程においてモロッコをはじめとする北アフリカからの移民受入れといった人口移動があり、昨今では EU 内でも経済的に困難を抱える旧東欧地域からの移民が多い。古典的植民地研究が指摘する経済的格差を利用した移民の実態がオランダには遍在している。私が居住していた地域は、かつての植民地に由来する地名（ジャワ通り、スリナム通り、スマトラ通り等）が数多く残ることからうかがえるように、移民が数多く住む地域であった。移民を数多く受け入れるオランダでは、その統合プログラムの一環として、オランダ語を話せない移民の子どもがオランダ語を学習したのちに正規教育課程に進めるようにするための移民クラスが設置されている。今回の在外研究に家族を帯同した私は、この移民クラスで自らの子どもがオランダの教育を受けることを通じてオランダの移民政策を実地で体験するという貴重な経験をする事ができた。子どものクラスメートは、当然ながら、多様なバックグラウンドを持ってオランダに移民してきており、その親たちとの交流を通じて移民事情をさらに垣間見ることができた。

「寛容の国」と言われ、移民にも比較的過ごしやすいとされるオランダでは、私たち家族も差別や排除を受けるような経験はほとんどなく、異「人種」間に差別感情があるようには見えなかった。しかし2020年に入って東アジアから新型コロナウイルスが広がり始めると、差別的なまなざしがアジア系の人々に向けられるようになる体験を数多く味わうようになったが、差別者は先行する移民たちである場合が多かった。移民等をめぐる差別の重層性を肌で味わうことができたのは、植民地研究をする私にとって貴重な経験となったと言える。

このような機会を与えていただいた同志社大学および関係者各位に感謝し、報告書とする。